

モラウの意味分析

—二格モラウ文とカラ格モラウ文の比較—

部田 和美

キーワード：二格モラウ文、カラ格モラウ文、受け渡しの顕在化、直接性、密接性

1. はじめに

授受動詞モラウ文では、与え手を二格とカラ格で表すことができる。

- (1) 太郎は花子からプレゼントをもらった。
- (2) 太郎は花子にプレゼントをもらった。

上記例のように、二格、カラ格のどちらを使用しても文の意味は変わらない。本稿では便宜上、(1)のようにカラ格で表されるモラウ文を「カラ格モラウ文」、(2)のように二格で表されるモラウ文を「二格モラウ文」と呼ぶことにする。これらは多くの場合互換性を持つが、以下のように交替不可の現象も存在する。

- (3) 太郎が故郷から便りをもらった。
- (4) *太郎が故郷に便りをもらった。 (柴谷 1978 : 301)

このような現象について、柴谷(1978)では二格名詞句に「動作主性」という意味が付与されるからだと説明している。二格名詞句の動作主性については杉本(1986)などでも指摘されているが、広く観察すると、必ずしもこの指摘が当てはまらない現象もあることが分かる。

- (5) a ??難病に苦しむ人などに「勇気づけられた」という手紙をもらうようになった。
b 難病に苦しむ人などから「勇気づけられた」という手紙をもらうようになった¹。
- (6) 本塁打に県民は元気をもらった²。

(5)では二格名詞句が動作主となり得るのにも関わらず許容度が低く、カラ格モラウ文の方が自然に感じられる。一方、(6)では動作主性のない無生物名詞(本塁打)でも自然

¹ 朝日新聞(聞蔵Ⅱビジュアル)2009年9月17日付けの記事より抜粋

² 朝日新聞(聞蔵Ⅱビジュアル)2009年11月28日付け記事

な文である。本稿では、上記例のような二格名詞句の「動作主性」だけでは説明できない現象も観察対象とすることで、二格モラウ文、カラ格モラウ文それぞれの特徴をより明確に示すことを目標とする。コーパスで収集した用例を中心に、その互換性から両者の差異について観察し、その違いが何に起因するのかについて考察する。結果として、両者には事態の捉え方に違いがあることを証明する。また、モラウ文と同様に受け手側からの表現であるクレル文についても考察を行う。

2. 先行研究概観

「モラウ／テモラウ」や「借リル」などに現れる二格・カラ格の表す意味役割については、柴谷（1978）、杉本（1986）、菅井（2000）、井上（2002）、山田（2004）、伊藤（2008）など多くの研究者によって取り上げられている。本節では柴谷（1978）と菅井（2000）での分析を中心に概観し、その共通性について述べる。

柴谷（1978）では次のような規則を示し、例を挙げて説明している。

動作主規則：主語以外の動作主名詞句を支配する名詞節に「に」を付加せよ。

起点規則：「起点」名詞句を支配する名詞節に「から」を付加せよ。

- (7) [山田先生 太郎が 本を借りる]
{動作主・起点} (柴谷 1978 : 300)

「太郎が本を借りる」という事態において、「山田先生」は受け渡しを実行する「動作主」と対象の「起点」の両方の範疇に属しており、どちらの規則でも適用できるとし、次の(8)(9)のように、「先生」は二格・カラ格ともに可能であるとしている。

- (8) 太郎が山田先生に本を借りる。 → 「動作主」としての「山田先生」
(9) 太郎が山田先生から本を借りる。 → 「起点」としての「山田先生」
((8) (9) 共に柴谷 1978 : 300 「→」以降の説明は筆者)

これに対し、「無生物名詞」の場合は「動作主」として働くことができないため、「起点」という範疇を対象とした起点規則だけが運用されるという。

- (10) 太郎が故郷から／*に 便りをもらった。 (柴谷 1978 : 301)

「故郷」は無生物名詞であり「動作主」にはなれず「起点」としてのみ捉えられるため、カラ格のみ可能となる。

杉本（1986）でも、次のような例を挙げて二格名詞句の動作性を示唆している。

(11) *近藤さんは警察に表彰状をもらった。

(12) 近藤さんは警察から表彰状をもらった。 (共に杉本 1986 : 366)

(11) では「警察」を「警察署長」に変えると自然な文になることから、無生名詞である「警察」は起点として捉えることができても動作主とは捉えにくいと指摘しており、二格名詞句の動作主性という点で柴谷 (1978) と一致する。

一方菅井 (2000) では、起点を表す二格は着点が一方向的に転用されたものであるという池上 (1981) 等の分析を援用し、着点の二格は主格名詞句から着点名詞句への順方向的な側面を表すが、起点の二格は着点名詞句に向けた順方向的な〈到達性〉を前提にして、その着点を起点として逆方向に汎用したものだと言う。順方向的な側面とは「働きかけの局面」、つまり〈申し込む〉〈求める〉という側面であり、逆方向的な側面とは「受け取りの局面」であるとする。次の例も、この二つの局面の関与から説明している。

(13) 花子が先輩に携帯電話を借りた。

(14) 花子が先輩から携帯電話を借りた。 (共に菅井 2000 : 19)

(13) では、主格名詞句「花子」から「先輩」に向けた順方向的な側面が示され、花子が先輩に「借りる」ことを求めたことが前提とされた文である。一方 (14) は、(13) で示された「花子」からの働きかけの側面は背景化され、結果的に「先輩」から「携帯電話」が一時的に移動していることを前景化した文であると述べている。「図書館に本を借りた」が非文で「銀行に資金を借りた」が適格になるのは、図書館というのは貸出業務が一般的なことであり、特に主格名詞句から働きかける必要もないが、資金を借りるには銀行に何らかの働きかけをしなければならないからだと説明するなど、起点の二格については主格名詞句からの働きかけ性を重要視し、柴谷 (1978) らが主張する起点二格名詞句の「動作主性」には否定的な立場をとっている。モラウ文に関しては、次の例において二格で適格性が落ちるのは「先生のところ」「警察」が働きかけの対象として不適切であるためだと述べている。

(15) 先生のところ??に／から 油絵をもらった。

(16) 警察??に／から 感謝状をもらった。 (菅井 2000 : 20³)

既述の通り、菅井 (2000) では起点二格名詞句の動作主性は否定しているものの、主格名詞句の働きかけに伝える能力が必要であると述べており、起点二格名詞句にも何らかの

³ 菅井 (2000) では (15) (16) ともそれぞれ二格モラウ文とカラ格モラウ文を個別に表示
??先生のところに油絵をもらった。
先生のところから油絵をもらった。

動作主性が必要であることを示唆している。奥津（1984）のモラウの意味構造に関する記述でも与え手・受け手双方の動作主性について指摘されており、これらを考慮すると、二格の意味だけではなく構文全体から意味を捉える必要があると思われる。特にモラウは、先行研究の分析では説明できないような現象もある。

- (17) 難病に苦しむ人など {から/??に} 「勇気付けられた」という手紙をもらうようになった。
- (18) 本塁打 {に/?から} 県民は元気をもらった。

(17) の「難病に苦しむ人など」は「動作主」であると考えられるが、二格モラウだと不自然さを感じ、カラ格モラウ文で表すのが適当である。一方、(18) の「本塁打」は無生物であり動作主性を持たないにも関わらず、二格モラウ文の方がより自然に感じられる。これらの現象は従来の記述では説明できない。次章ではより多くの用例を観察することでそれぞれのモラウ文が持つ意味の違いについて考察し、上記のような許容度の違いが何に起因しているのかについて述べる。各モラウ文の分析だけではなく、動詞「モラウ」の本質についても明らかにする。

3. 分析

3.1 二格モラウ文の意味について

3.1.1 用例

まず、二格モラウ文・カラ格モラウ文が実際どのように使われているのか、またその互換性について観察するため、CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊、朝日新聞(聞蔵Ⅱビジュアル) 2009 年 9 月 11 日～25 日、11 月 10 日～12 月 16 日計 52 日分から用例を収集した⁴。本稿での分析はこれらの用例を中心に行うが、必要に応じて作例も使用する。また、新聞データからの引用文に関しては「2009 年 朝日新聞」を省略し、日付のみを記載する⁵。

3.1.2 二格モラウ文が不自然になるもの用例

抽出した用例を観察してみると、二格モラウ文において二格と共起しない名詞にはいくつかの特徴があることが分かった。以下、順に観察していく。

- (19) 正体はゴミ処理場 {から/*に} もらったペットボトル。 (9.11)
- (20) 山 {から/??に} もらったものを少しでもお返ししたい。 (11.7)

⁴ 形態は「もらう、もらった、もらって、もらい、もらわ、もらえ、もらお」で検索した。全 136 例、うち二格モラウ文は 31 例、カラ格モラウ文は 105 例。

⁵ 本文中では用例は {に/から} のように表示するが、収集した記事は適格文となる方である。

(19) 正体はゴミ処理場 {から/*に} もらったペットボトル。
→ (記事) 正体はゴミ処理場からもらったペットボトル。

「ゴミ処理場・山」などの場所名詞が二格と共起しないのは、先行研究でも指摘されている通り、場所名詞が動作主としての働きかけ性を持たないからだということもできる。菅井（2000）では「銀行に資金を借りた」のように、主格名詞句からの働きかけに対応できることを二格名詞句の条件として示しているが、モラウ文においては少し不自然さが残る。

- (21) {企業から/?企業に} 前向きな返事もらった。
- (22) {会社から/?会社に} ボーナスもらった。
- (23) 昨日 {大学から/?大学に} 卒業証書もらった。

このように、二格モラウ文では二格名詞句は [+human] に限定されることが予測されるが、用例を観察すると人間であっても二格モラウ文では不自然になる現象が存在する。

- (24) 「マキはご先祖 {から/?に} もらった」と県の認定する植木伝統樹芸士、川口勇次さん（64）は言う。 (9.17)
- (25) 現在、家に残されているのは由緒書きと系図だけ。「信長 {から/?に} もらった褒美があったはずだが、今では何もない」と貞義さん。 (9.17)

「ご先祖」「(織田) 信長」は人間ではあるが現存していない。上記例では、事物の受け手（話し手）が直接「ご先祖」や「信長」から対象を受け取ったような印象を受けるため不自然になると考えられる。よって、二格モラウ文では二者間での直接的な受け渡しを行えることが条件となっていると言える。

しかし一方で、「現存の人間」であっても二格を取ると不自然になる場合もある。

- (26) 地方の学生など {から/?に} 手紙やプレゼントをたくさんもらった。
- (27) 日本人 {から/?に} これまで P とか M とか、いろんなメーカーの品物もらったけど、あんたから買ったのが一番上等だ。 (『風に吹かれて』⁶)
- (28) 難病に苦しむ人など {から/?に} 「勇気付けられた」という手紙をもらうようになった。(再掲)
- (29) 出席者の大多数 {から/?に} 高い評価をいただいた。

(26) ~ (29) は、(24) (25) とは異なり「現存する人間」であり、直接的な受け渡しが可能だと考えられるが、二格モラウ文では不自然になってしまう。これらは全て二格をカラ格に替えると違和感はない。「地方の大学生など」「日本人」「出席者の大多数」という

⁶ 五木寛之『風に吹かれて』（CD-ROM 版新潮文庫の100冊より）

表現では人物が特定されず、受け渡しへの関わりも不鮮明である。このような「特定化されない人間」は二格と共起しないということになる。上記例を次のように変えると許容度が変わることからもそれが理解できよう。

- (30) 地方の学生に手紙やプレゼントをたくさんもらった。
- (31) パーティーに参加した日本人に、これまでPとかMとか、いろんなメーカーの品物をももらったけど、あんたから買ったのが一番上等だ。
- (32) 難病に苦しむ人に「勇気付けられた」という手紙をもらうようになった。
- (33) 出席した多くのお客様に、高い評価をいただいた。

「地方の大学生など」「難病に苦しむ人など」から「など」を除き、「日本人」を「パーティーに参加した日本人」に、「大多数」を「多くのお客様」に替えて、曖昧だった人物像をある程度明確にすると許容度が上がる。与え手を特定化することで、与え手が受け手に事物を渡すという「受け渡しの事態」そのものを顕在化させていると考えられる。これは、先に述べた「受け渡しの直接性」とも共通しており、与え手と受け手が対象を通じて密接につながっていると言える。

ここまでの観察によって、二格モラウ文には「受け渡しの顕在化」「受け手と与え手の直接的関係性」といった特徴があることが推測される。しかし以下の現象はどうか。

- (34) テレビの星占いの結果に勇気をもって、再びバス会社へ問い合わせた。
- (35) 漫画の年賀状に、元気をもらっている。 (11.23)

これらの文では、二格名詞句が「星占いの結果・年賀状」といった「無生物名詞」であり、受け手に対する働きかけ性は持たない。また、受け渡しの対象もこれまで観察してきたような物質的なものではなく、抽象的なもの（勇気・元気）である。よって上記例はいわゆる一般的なモラウ文とは異なっており、「物の受け渡し」という範囲では捉えられない。このような現象はこれまで例外とされ、あまり分析対象として扱われてこなかったが、本稿では、これらの現象が日常的にもよく使用されていることから、モラウ文の一形式として分析対象に加える。以下で詳しく観察し、これまで見てきた二格モラウ文との関連性について考察する。

3.1.3 抽象的対象のモラウ文

前節で述べたように、モラウ文では、実質的な「物」の受け渡しだけではなく抽象的対象の授受も示す。

- (36) ぼくは生徒たち {に／から} 勇気をももらった。

(37) 私はそのオリンピック選手 {に／から} 感動をもらった。

上記例は、「勇気・感動」が「生徒・オリンピック選手」の働きかけによって話し手に移動したというのではなく、話し手の感情の表出を示す。そのため「生徒・オリンピック選手」は受け渡しの「動作主」ではなく「勇気・感動」を発生させる「要因」であると考えられる。つまり、上記例では「生徒・オリンピック選手」によって「勇気・感動」が話し手の内面に発生したことを表している。受け手が何かを得たという点では物の受け渡しを表す一般的なモラウ文と変わらないが、獲得までの過程が相手からの働きかけによってなのか、それとも自然発生的であるのかという違いがある。既述のように、抽象的対象のモラウ文では、二格が無生物名詞句でも自然な文になる。

(38) テレビの星占いの結果に勇気をもって、再びバス会社へ問い合わせた。(再掲)

(39) 漫画の年賀状に、元気もらっている。(再掲)

(40) 左手だけで演奏活動を続ける館野さんの姿に「勇気もらった」という。(9.12)

二格モラウ文は「顕在化された受け渡し」を表すと前節で述べた。上記例の「星占いの結果・年賀状・姿」は、与え手としての働きかけを持たないため、与え手から受け手への直接的な受け渡しが不可能であり、前節で挙げた推測なら二格モラウ文は不適格となるはずである。しかし抽象的対象のモラウ文の場合、二格モラウ文がごく自然であり、むしろカラ格モラウ文の方が違和感のあるケースもある。

(41) ?テレビの星占いの結果から勇気をもって、再びバス会社へ問い合わせた。

(42) ?漫画の年賀状から、元気もらっている。

このような二格モラウ文では、二格名詞句で示される「要因」によって話し手がある感情を持つことになるという「結果」が示されるため、二格名詞句と話し手が位置する主語名詞句⁷との間に強い関係性があると考えられる。物の受け渡しを示す一般的な二格モラウ文の「与え手と受け手の直接的関係性」「受け渡しの顕在化」といった特徴も、二格名詞句と主語が密接につながっていることを意味し、二者の関係には「密接性」といった共通の特徴があることが分かる。菅井(2000)では、二格の様々な用法の観察から、その共通した意味特徴として「接近性」を挙げているが、これは本稿での分析とも共通する。

以上の観察から、二格モラウ文で示される特徴として以下を挙げる。

物理的対象の二格モラウ文： 物の受け渡しが与え手と受け手の間で直接行われる

⁷ (38) ~ (40) の例では主語になる「私」などの一人称や語り手が省略されている。

・私は漫画の年賀状から、元気もらっている。

物の受け渡しが顕在化されている

抽象的対象の二格モラウ文： 要因とその結果（感情の発生）を表す

共通した意味特徴：「密接性」

3.2 カラ格モラウ文の意味について

カラ格モラウ文のカラ格名詞句は、先行研究で指摘されているように対象の「起点」を示す。そのため、二格モラウ文では不自然になる次のような文も成立する。

- (43) 正体はゴミ処理場からもらったペットボトル。
- (44) 山からもらったものを少しでもお返ししたい。
- (45) マキはご先祖からもらった。
- (46) 難病に苦しむ人などから「勇気付けられた」という手紙をもらうようになった。

カラ格で「出所」として明確化されることで、「与え手の働きかけ性」は背景化される。そのため、二格モラウ文のように与え手と受け手が受け渡しの行為によって直接つながることを示す必要がないのだと考える。このことは以下の抽象的な対象のモラウ文における適格性の違いにでも分かる。

- (47) ぼくは生徒たちから勇気もらった。
- (48) 私はそのオリンピック選手から感動もらった。
- (49) ?テレビの星占いの結果から勇気もらって再びバス会社へ問い合わせた。
- (50) ?漫画の年賀状から元気をもらっている。
- (51) ?本塁打から県民は元気をもらった。

抽象的対象物でもカラ格モラウ文は成立するが、(47) (48) は自然な文であるのに対し、(49) ~ (51) では少し不自然さを感じる。「元気をもらう」のような文では、「与え手」が「要因」に変わり、「要因—結果」を表すことは既述の通りである。二格モラウ文では与え手と受け手に密接な関係性があり、これが「要因と結果」の関係と共通することから自然な文になることを述べたが、カラ格名詞句が示すのはあくまで「出所」である。そのため、二格名詞句のように事態とのつながりを強く示せないのである。(49) ~ (51) のような無生物名詞では特に要因性が強調されるため、起点を示すカラ格モラウ文では違和感を持ってしまうのだと思われる⁸。

以上の結果をまとめると以下のように示される。

⁸ ただし「その映画から勇気もらった」「彼の走る姿から感動もらった」などは違和感がないと感じる人も少なくなく、必ずしも本稿での説明が正しいとは言い切れない。これについては今後の課題とする。

- ・物理的対象のカラ格モラウ文：対象の出所を示す
与え手と受け手の直接性・顕在性は問わず、対象の「出所」だけを明確にする
- ・抽象的対象のカラ格モラウ文：「要因－結果」の強い関係性は示さないため、成立しにくい場合もある

次に、なぜニ格モラウ文とカラ格モラウ文とで意味の差異が生じるのか、その要因を動詞「モラウ」の持つ性質から考察する。

3.3 動詞「モラウ」の意味について

ニ格モラウ文とカラ格モラウ文は多くの場合互換性を持つが、相違点もあることが以上の観察で確認できた。モラウがカラ格と共起し、与え手による働きかけを示さずとも文が成立するのは、モラウ自体に受け渡し行為の結果を要求するという性質があるからだと考ええる。いくつかの例を挙げながらこれを検証していく。

まず、モラウ文ではヤル・クレル文と異なり、受け手側の受け取りに対する意志性が必要になる。

- (52) *庭の花が花子に水をもらった。
- (53) 花子が庭の花に水をやった
- (54) ??ぼくのカブトムシがおじいさんにきゅうりをもらった。
- (55) おじいさんがぼくのカブトムシにきゅうりをくれた

ヤル・クレル文の受け手は植物・昆虫などでも可能であるが、モラウ文では許されない。ヤル・クレル文では与え手の行為が示されれば受け手側の意志性について言及する必要はないが、モラウ文ではむしろ「受け手側の意志」が重要だということになる。一方、与え手側に関しては、意志性がなくてもカラ格と共起することでモラウ文は成立するが、ヤル・クレル文は与え手側に無意志物を置くことはできない。

- (56) a *ごみ処理場が太郎にペットボトルをやった。
- b *ごみ処理場が私にペットボトルをくれた。

このことから、モラウ文では受け手側の受け取りに対する意志性が文の成立に関与することが分かる。つまり、モラウが要求する受け手には [+意志性] という性質があるということになる。

また、モラウは「与え手」「出所」など対象の元の存在場所を必ずしも提示する必要はない。次の例は、与え手が省略されているのではなく明確な与え手は存在しないと捉える方

が自然である。

- (57) a このお菓子、(??君に) 一個もらうよ。
b このお菓子、(私が君に) 一個やるよ / (あなたは私に) 一個くれる？
- (58) a この国においては、妻を複数もらうことができる。
b *この国においては、妻を複数くれる。

(57b) では与え手が省略されていると考えられるが、(57a) は特定の与え手が含意されているわけではなく、そこに置いてある誰かのものを自分のものにするという意味で捉えられる。(58a) にいたっては与え手を要求しないという見方がむしろ自然である(クレル文では不自然になる)。モラウ文では基本的に「受け手が何を所有する(した)のか」が述べられているのである。(57a) が可能であるのは受け手(話し手)の所有権外にあった対象(お菓子)が自分の所有になったことが示されればよいからであり、(58a) も同様の理由から自然な文になる。以下のような例からもこの特徴が見て取れる。

- (59) 子供のいない私たち夫婦は養子をもらうことにした。
(60) パンフレットは説明会会場でもらってください。
(61) 新装オープンした居酒屋で記念品をもらった。

(59) は(58)と同様、与え手を要求しない例である。(60)(61)は場所格(デ格)で示され、与え手が省略されているとも考えられるがそれは必須ではなく、ただ受け手がその場所で何かを新たに所有することになる(なった)ことを表している。

以上の観察から、モラウ文の受け手は[+意志性]⁹であること、また、受け渡しに関しては、与え手からの働きかけよりも受け取った結果の方に焦点があるということを示した。このような特徴が見られるのは、そもそも動詞「モラウ」に「新たな事態の出現」つまり「対象の(所有権)変化」という性質が備わっているからだと推測する。「対象の(所有権)変化」とは、この場合受け手による対象の所有権取得を意味する。モラウに二格名詞句が共起することで、与え手と受け手の密接性が強調され、背景にあった受け渡しの行為が顕在化するのに対し、カラ格名詞句が共起すると密接性は薄れ、動詞「モラウ」が本来持つ特徴がそのまま現れるのだと言えよう。

モラウ：「受け手の意志性」「対象の(所有権)変化」

⁹ 受け手の意志性についてはまだ曖昧な点も多い。本稿では、用例でも見たように、意志性とは受け取りに積極的に関わる意志的態度と考えるが、「太郎にプレゼントをもらった。」のような例において、受け手の意志性がどのように働いているのかなど疑問も残る。前述の通り奥津(1984)では受け手側(奥津では「目標格」)の動作主性を認めているが、受け取りの意志性と奥津の言う動作主性の共通性などについても今後検証していきたい。

- ・ニ格モラウ文：参与者間の密接性表示→受け渡しの行為の顕在化
- ・カラ格モラウ文：対象の出所のみ表示¹⁰

次に、モラウ文と同様受け手側からの表現であるクレル文について、モラウ文との比較も含めて簡単に述べる。

4. クレル文について

クレル文に関しては、本動詞よりも補助動詞テクレル文での研究が盛んに行われている（堀口 1987, 山橋 1999, 山本 2002, 山田 2004, 高見・久野 2002, 2014 など）。クレル文はモラウ文と同様受け手側からの表現であるが、モラウ文の受け手が主語であるのに対し、クレル文ではそれが目的語である点が異なる。この違いが両者の意味にどのような差異をもたらすのかについて考える。

多くの場合、クレル文とモラウ文は互換性がある。次の例は、本稿におけるモラウ文の分析で見えてきた例文をクレルに置き換えたものである。

- (62) 出席した多くのお客様が、高い評価をくれた。
- (63) 警察は近藤さんに表彰状をくれた。
- (64) 日本人がこれまで P とか M とか、いろんなメーカーの品物をくれた。
- (65) 地方の学生などが手紙やプレゼントをたくさんくれた。
- (66) 山がくれたものを少しでもお返ししたい。
- (67) 本塁打が県民に元気をくれた。
- (68) 星占いの結果が私に勇気をくれた。

このように、モラウで示された例文のほとんどがクレルでも成立する。(66)～(68)のような抽象的対象のクレル文も可能である。これは、クレル文でも恩恵性の判断が受け手側によってなされていることを示し、主語名詞句の影響によって受け手の内面に「勇気」が生まれたという意味で捉えることができる。

しかし、物理的対象の受け渡しでは、以下のようにクレル文では許容度が落ちてしまう例もある。

- (69) ??正体はゴミ処理場がくれたペットボトル。
- (70) *廃墟となった建物が、見えそうなものをくれた。
- (71) 廃墟となった建物から、見えそうなものをもらった。

¹⁰ 冒頭で述べたように、多くの場合、ニ格モラウ文とカラ格モラウ文は交替可能である。カラ格名詞句が「人間」の場合、対象の変化に関わる働きかけ性が認識されるためだと考える。

(70) は (71) のようなカラ格モラウ文であれば適格になる。場所名詞と共起しないというわけではない。(63) の「警察」を「警察署」のように場所性を強くしても適格文であることに変わらない(「警察署は近藤さんに表彰状をくれた。」)。(69) との違いは「働きかけ性が読み取れるかどうか」にある。「警察・警察署」は、その内部に受け手に働きかける人物の存在を想像させるが、(69) (70) の「ゴミ処理場・廃墟となった建物」はその中にいる人物が想定しにくい。クレル文では「受け手に向けた働きかけが想定できるかどうか」で文の成否が決定すると言える。以下の例が不自然に感じるのもこの理由による。

(72) ?「マキはご先祖がくれた」と言う。

(73) ?信長がくれた褒美があったはずだが、今では何もない。

二格モラウ文での分析では、「ご先祖・信長」のような非存在の人間は直接的な受け渡しができないため不自然な文になることを述べた。クレル文においても非存在の人物では受け手への働きかけが想定できないため不自然になると考えられる。また、上の (64) (65) のような与え手が不特定の人物でもクレル文が成立するのは、二格モラウ文のように受け渡しを顕在化させる必要がなく、ただ与え手の働きかけ性が読み取ればよいからであると説明できる。

以上の観察から、クレル文では与え手の働きかけ性が想定できるかどうかとその成立条件となることが分かった。モラウ文が受け渡しの結果に焦点があることは既に述べたが、クレル文では与え手の行為性に焦点があると言えるだろう。それは以下の例でも明らかである。

(74) テーブルの上にあったパンを一つもらって食べた、

(75) *テーブルの上にあったパンを一つくれて食べた。

(76) *私は太郎に手紙をもらったが、(私は) 受け取らなかった。

(77) 太郎は私に手紙をくれたが、(私は) 受け取らなかった。

(75) のように与え手の働きかけ性が読み取りにくいとクレル文が成立しない。また、(76) のモラウ文が非文になるのは、受け渡しの結果を表す前文と結果をキャンセルする後続文とが矛盾するからであるが、(77) のクレル文は結果ではなく与え手の行為を表すため、後続文との矛盾もなく適格になる。このような「働きかけ性の想定」については更なる検証が必要であるが、今後の課題とする。

5. まとめ

本稿では、モラウの二つの構文、二格モラウ文とカラ格モラウ文について観察し、その違いについて分析した。

二格モラウ文では「対象が与え手によって受け手に渡される」という受け渡しの行為が明示的に表されるのに対し、カラ格モラウ文では受け取りの結果を表す。このように、両者の違いは受け渡しの事態の捉え方にある。異なる用法が存在する理由については、動詞モラウの持つ「対象の（所有権）変化」といった基本的性質が関与していることを示唆した。モラウの基本義が構文にかかる意味としてそのまま反映されているのがカラ格モラウ文であり、与え手と受け手の密接性を付加させることで受け渡しの行為を顕在化させたのが二格モラウ文であると言える。また、本稿の最後でクレル文の特徴についても考察した。モラウ文では対象を受け取った結果に焦点があり、クレル文ではむしろ受け渡し行為の方に焦点があることを示したが、これについては更なる分析が必要であるため今後の課題とする。

【参考資料】

CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊
朝日新聞（聞蔵Ⅱビジュアル）

【参考文献】

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店
- 伊藤健人(2008)『イメージ・スキーマに基づく格パターン構文—日本語の構文モデルとして—』ひつじ研究叢書 64
- 井島正博(1997)「授受動詞文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』32, pp.63-94.
- 井上和子(2002)「能動文、受動文、二重目的語構文と「から」格」*Scientific approaches to language 1*, 神田外語大学, pp.49-76.
- 大曾美恵子(1983)「受動詞文と二名詞句」『日本語教育』50, pp.118-124.
- 奥津敬一郎(1982)「～てもらふとそれに対応する中国語の表現—“清”を中心に」『日本語教育』46, pp.92-104.
- 奥津敬一郎(1984)「授受動詞文の構造—日本語・中国語対照研究の試み—」『金田一春彦博士古希記念論文集 第二巻』三省堂, pp.65-88.
- 奥津敬一郎(1986)「やりもらい動詞」『国文学 解釈と観賞』51-1, 至文堂, pp.96-102.
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店
- 菅井三実(2000)「格助詞「に」の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第二分冊 20, pp.13-23.
- 菅井三実(2001)「現代日本後の「二格」に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』第二分冊 21, pp.13-23.
- 菅井三実(2005)「格の体系的意味分析と分節機能」『認知言語学論考』4, ひつじ書房, pp.95-131.
- 杉本武(1986)「格助詞—「が」「を」「に」と文法関係—」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社,

pp.227-391.

杉本武(2000)「「から」受動文と移動動詞構文」『空間表現と文法』くろしお出版, pp.1-27.

高見健一(2000)「被害受け身文と～V てもらう構文—機能的構文論による分析—」『日本語学』

19-5, 明治書院, pp.215-223.

高見健一・久野暉(2002)『日英語の自動詞構文』研究社

高見健一・久野暉(2014)『日本語構文の意味と機能を探る』くろしお出版

竹沢幸一(1995)「「ニ」の二面性」『月刊言語』24-11, 大修館書店, pp.70-77.

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

堀口純子(1987)「「～テクレル」「～テモラウ」の互換性とムードの意味」『日本語学』16-4, 明

治書院, pp.59-72.

益岡隆志(2001)「日本語における授受動詞と恩恵性」『日本語学』4, 明治書院, pp.26-32.

宮地裕(1965)「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63, pp.21-33.

山岡政紀(2008)「第6章 授受構文の構造」『発話機能論』くろしお出版, pp.119-143.

山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』

明治書院

山橋幸子(1999)「「てくれる」の意味機能—「てあげる」との対比において—」『日本語教育』103,

pp.21-30.

山本裕子(2002)「「～テクレル」の機能について—対人調整的な機能に注目して—」『言葉と文化』

4, 名古屋大学国際言語文化研究科, pp.127-144.

Masuoka, Takashi (1981) 'Semantics of the Benefactive Constructions in Japanese' in *Descriptive and Applied Linguistics*, Vol.14, ICU, pp.67-79.

Shibatani Masayoshi (1979) 'Where Analogical Patterning Fails', in *Papers in Japanese Linguistics* 6, pp.287-307.